

ISBN4-903353-00-1

21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」
Establishment of World Organization for *Kanbun* Studies

2004年度 公開講演会報告

—各国における日本漢文学研究の現状と課題—

二松学舎大学21世紀COEプログラム

目次

まえがき・・・1

1. 「台湾における日本漢文学研究の現状と課題」・・・・・・・・・・・・・・3

2004年11月27日

講師 徐興慶
台湾大学 教授

2. 「中国における日本漢文学研究の現状と課題」・・・・・・・・・・・・・・39

2004年12月17日

講師 呉格
復旦大学 教授

3. 「欧州における日本漢文学研究の現状と課題」・・・・・・・・・・・・・・55

2005年1月8日

講師 ウイリー・F・ヴァンデワラ
ルーヴァンカトリック大学 教授

台湾における日本漢文学研究の現状と課題

「公開講演会」報告の発刊にあたって

二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」における実質的活動は、2004 年度下半期より開始されたが、その主要活動の一部である海外研究者との国際的ネットワーク作りの一環として、公開講演会を 3 次にわたって開催した。これは世界における日本漢文学の現状がいかなるものであり、いかなる課題をかかえているかをメインテーマとしたもので、本報告書目次にあるような日程で開催された。

これらの講演にわれわれが期待したものは、題目にあるとおり各国・地域における日本漢文学の現状と課題を知ること、と同時にその講演において明らかにされるであろう研究者の動向とその所在、あるいは日本漢文学関係文献の所在の情報を得ることであった。

2004 年 11 月開催の、台湾大学 徐興慶 教授の講演は、1950 年代の台湾における日本漢文研究から現代に至る研究動向や学界的対応の変化について述べられ、特に近年における台湾の研究現状については各研究者とその成果におよんで、詳細を極めた。こうしたなかで台湾大学東アジア文明研究センターの立ち上げは、飛躍的に日本漢文学研究の質と量を向上させたものであったが、恒久的組織ではないため、今後においてハード面の確保と人材の育成への課題をかかえていることが報告された。

2004 年 12 月開催の、上海復旦大学 呉格 教授の講演は、「近時数年来における中国学者の海外漢籍に対する調査研究」等の副題を設けて、図書館における長年にわたる漢籍整理の実績をもとに、中国研究者による海外漢籍の調査研究の動態と成果、および『中国蔵和刻本刊記図録』編纂の状況を中心に、アメリカにおける関連文献の収蔵状況と関連する文献目録、あるいは中国研究者による海外文献に関する目録等の紹介をおこなうもので、中国における和刻本漢籍への注目についても、新たな認識を促すものであった。

2005 年 1 月開催の、ベルギー・ルーヴァンカトリック大学 ウィリー・ヴァンドゥワラ 教授の講演は、欧州における日本漢学研究の特質として、中国文化の変質ではなく日本独特の文化としての視点、あるいは個人の思想家の伝記や思想研究を中心とする研究傾向の紹介がなされたが、そうした傾向が欧州独自の伝統的文献学の影響によるものであると位置づけられた。そうした位置づけのなかで、欧州における研究者の動向と研究成果の紹介がなされたが、課題として概して日本漢学研究は少なく、また言語史的観点や禅宗と漢文、変体漢文などについての研究も希少であることが明らかにされた。

これらの講演において、当初我々が目標とした各国・地域における日本漢文学研究の現状と課題のみならず、研究動向や人材の所在、また関連文献の所在などについても、多くの情報を得ることができたと考える。さらに 17 年度に予定している EAJRS への参加と報

告の実施、さらに欧州現地でのより具体的情報収集の実現にむけて、これらの講演と人材交流の果たす役割も大きいにちがいない。ただ多少の差はあるものの共通に問題にされたことは、日本漢文学という言葉の概念規定であった。我々は、一様に日本人が漢文によって記述した文献を扱う学と認識しているが、これらの講演において示された個々の考えをも参考として、我々自身にとっても、より明確な日本漢文学の定義を再確認する必要があることを認識させられたのである。これも一つの成果であるといえよう。

なお今後は、個別の研究テーマにおいてもこうした講演会等を開催して、より多くの海外研究者との交流を深め、人的ネットワークを充実させていく必要がある。

2005年9月

拠点リーダー 高山 節也